ものに過ぎなかつたから、文章法の研究は依然として演繹的なもの論理的なものであつたことは止むを得ぬことであつた。翻つて日本語に於ける文章法の研究を見ると、更にもつと幼稚なものであつた。もし文章法上の研究として見るべきものがあるならば、それは係結の問題であらう。守部の文章選格のごときは修辭上の論にして文法の著述といふことは出來ない。文章法としてはそれ故に本來研究といふべき研究はなかつたといつて差支ないであらう。今日文章法として行はれてゐるものは、いづれも西洋の教科文典の規範を取つて、それと大に言語の組織の異なる日本語に直譯的に當てはめたものであるから、その不完全なこと、その不徹底なことは怪しむに足らない。

文章法の名のはじめて見えたのは、明治八年文部省から出た田中義廉の小學日本文典であつて、その總論に文法論を字學・詞學・文章學に分つべき事を敎へてゐるが、文章論についての實際の記述は何も見えてゐない。翌年出た中根淑の日本文典にも文字論・言語論・文章論・音調論等の部門があり、文章法の目はあるが、その名の下に說かれてゐるものは僅かに係結のこと乃至文中の符號に關する如きことで、いはゆる文章法として體裁をなしてゐない。明治二十年に出たチエンバレンの日本小文典に至つてはじめて文章法をやゝ委しく說いてあるが、今日もろもろの文法の著述に一般に說いてゐるやうな文成分の組立などを論じたものゝといへば、明治廿三年に出た手島春治の日本文法敎科書をその嚆矢として推さざるを得ないであらう。その文章法は起結三轉論・文章の分解・言葉の關繫・文章の正誤等の目があり、文章の關繫に於て主語・確定語・擴張語の三を分ち、言葉の關繫に於て主語・關繫語・確定語・客語について說いてゐる。大概博士の廣日本文典の文章篇がまづ主語・說明語・客語・修飾語を說き、聯構文・挿入文・倒置句・呼應・略語・略句等を說いてゐることは比較的新しいことであるから人々の知つてゐることであらう。その後も或は國語に特有なる語法としていはゆる總主といふことを論じた草野氏があり、或は岡田正美氏・山田孝雄氏・岡澤鉦治氏等があり、それ〳〵眞摯なる研究を發表せられてゐることをおもへば、文章論についての研究について學者が努力を怠つたといふのではないが、今日までの長い文法の研究史上、品詞論はその內容整

頓して大に見るべきものあるに比べて、文章論は歴史が新しいだけにまだ極めて幼稚の域にあつて、之をして眞に見るべき躰系たらしめることは一に將來の研究に俟たなければならない。その意味に於て、余の本書に說くところも、極めて漠然たるものとなるの止むを得ざるものがあつた。

日本語の文章論は未成品である。日本人の考へ方がどういふ風に文の上にあらはれるか、まづ事實そのものを歸納的に研究して掛らなければならぬ。遡つて上古から今日に至るまで、各時代に亙り、各種の言語資料に亙つて文章の組立を歷史的に調べて見なければならぬ。その歸納的歷史的研究の上に立脚して、はじめて日本語の文章法は建設せられるのである。もしさうでなくして、自己の獨斷により、又西洋文典の規範をもつて來て演繹的に文章法の事實を說くやうなことでは、その文章法は殆ど思想發表の指導として價値のないものと云つてよろしい。從來の國語教育に於てやゝもすれば論理に泥み西洋式に囚はれ、文の提出なども人工的な不自然な作爲を敢てした嫌のあつたのも、一つにはこの文章法の歸納的研究が出來てゐなかつた罪であると

云はなければならない。小學校の舊讀本の編纂者がこの點に氣づいて『學齡兒童ノ談話ハ必ズシモ嬰兒ノ片言ニアラズ、隨分複雜ナル口語ヲ話シ得、綴リ得ルコト、實例ニ徵シテ明白ナレバ、寧ロ自然的形態ヲ採ルノ優レルニ若カザルヲ信ジ、今回ハ大體ニ於テ簡單ヨリ複雜ニ進ムヲ方針トシテ、出來得ルカギリハ自然的口語ニ近カラシムルヲ期セリ』といつてゐるのは、國語教育上の一大進步であり、今日の小學國語讀本がこの點に於て更に一段の進境を示してゐるのは誠に喜ぶべきことである。

文章法の研究は是非とも心理學の基礎の上に立てられなければならぬ。西洋に於ても言語の研究が一大革新を遂げるに至つたのは、近世に於ける新文法學派（グラマリアン）の心理的研究の運動に負ふところが大きい。文章法の研究は最も遲れてゐる。それは畢竟他の部門に比して、心理的研究の恩惠を蒙ることが遲かつたからである。近世の言語學者中もつとも此の方面の研究に理解をもつてゐたパウルでさへも、その名著「言語史原理」の第一版には何ら文章法に關する記述を載せず、やうやく第二版に至つて之に關する二章を補つたとい

ふ位である。

言語の研究が心理學に補助を仰がなければならぬことは、今日に於て何人もみとめてゐることである。文章法の組織に對して最も大切なるものはやはり心理的研究である。この點に於てウントの說の如きは、最も參考しなければならぬものゝ一つである。

文とは何ぞ

文とは何か。之に對する答は古來論理的色彩の勝つたものと、文法的調子の強いものと、是等兩者を調和せむと試みたものとある。文とは「單語の結合したもので纏つた思想を表白するもの」といつたものがある。更に之に文法的の見方を強くし、「文とは單語の集合して全一體としてあらはされてゐるもの」といふものもある。之を「思想を言語上にあらはしたもの」と定義してゐるものは、文をもつぱら論理的に見たものゝ說明したところである。

往々ただ一個の單語でも文をなすものがあり、いくら單語が澤山並んでも文を成さない場合があるから、文を語の結合といふ丈では不完全であつて、この定義は廣すぎるともいへるし、狹すぎるともいへることになり、之を補はんとすれば、その結合が全體として纏つてゐると稱へる必要が起つて、忽ち論理の範圍に移り入ることとなる。しかしこれを思想の言語の上にあらはれたものと定義する事は、思想といふ言葉が不明瞭であることが非常な缺點であつて、思想といふ論理的の名稱が文といふものゝ概念を決定する上に影響を及ぼし、すべてを論理的に考へられる文卽ち判斷をあらはす文に引きつけ、その結果論理的判斷にあらざる發表は文でないとしたり、或は反對に判斷をあらはすものでもないものを强ひて論理的判斷と曲解したりして、論理學と文法學との混亂を惹起すが如き結果に陷つたのである。かくの如くして論理的の定義と文法的の定義とは文章法論の歷史上消長盛衰があつたが、單語もしくは單語の結合をして文たらしめる心理的特徵を、話をなすものゝ意識に求めて、この問題に解決を與へようとしたものは、心理學の理論に基礎をおいて言語を見て行かうとするパウルやヴントらの人々である。

文とは『觀念又は觀念群が話す人の精神內に結合したことを現す符牒であつて、同じ觀念の同じ結合を聽く人の心の中に起す爲の手段である』といい

ふ。是がバウルの述べた文の定義である。ヴントはこの說に反對した。單語の結合したものが文ではない。文がすなはち言語の根本である。かうした考からヴントは文を見てバウルの說を駁擊した。彼とバウルとの間には論爭が重ねられた。今日に於ては一般にヴントの說が有力なものとして信ぜられてゐる。文は語の結合であるとする定義を捨てゝ、觀念の結合とする說明をとることは、何ら獲る所がないばかりではなく、寧ろ反對に失ふところが多い。語の結合といふ說明は皮相の見解のやうに見えるが、少くとも誤ではない。之に反して「草が靑い」といふやうな文を見ても、之を表象の結合と稱けるならば、之を誤といはざるを得ないではないか。「草」と「靑い」といふ表象は、獨立に別に存在してゐるものが、文によつて一體として結び付けられるのでなくて、兩者同在して居るのである。「草」といふ表象は「靑い」といふ性質と共に認められるもので、その結合は文を俟つて始めて出來るのではないからである。かういふ風にヴントは見てゐるのである。

第二章　文の論理的關係

ヴントに言はせれば、文は表象の結合ではない。文として言ひ表される表象の全部が一體として意識の中に存在してゐて、それが部分に分解せられ統覺せられて行くのである。分解は單なる分解ではない。部分は有機的組織を保つて全體として意識の中に在るのである。全體を形づくる部分的の表象は時の移るに從つて意識の焦點となり、その他の表象は之に比べると明瞭の度を缺いて居るが、部分はその語られる瞬間に一つ一つ消えて行つてしまふものでない。それ故に文は一面に於て分析的であると共に、一面に於て總合的である。一方に於て併存的の過程であると共に、一方に於て繼續的の過程である。

この部分相互の關係が卽ち論理的關係である。それは注意又言ひかへれば統覺が全體から部分に順次焦點を移すことを表すので、この場合、表象は常に意識の焦點となつたものとその餘のものとのこの二つの區分を取つて居

主部と述部

修飾語

る。焦點となつたものが卽ち主部で、殘されたものが述部である。この第一の分解に繼いで今度は主部又は述部もしくは主部・述部共に更に第二の分解を受けて、焦點となつたものとその餘のものとの二部となる。その場合、初に選ばれた方が心理的にいへば主部で、それと關係をつけられたものが修飾語である。それゆゑに主語と修飾語、述語と修飾語の關係も論理的關係である。かういふ風にしてわれ〳〵の思惟の形式は二元的に進んで行くのである。

青い草がたくさん生えて居る。

「青い草が」が主部で「たくさん生えて居る」は述部である。主部及び述部に更に分解が行はれると、主部は「草」といふ主語と「青い」といふ修飾語、述部は「生えて居る」といふ述語と「たくさん」といふ修飾語に分れるのである。

主部 { 修飾語 青い　主語 草が }

述部 { 修飾語 たくさん　述語 生えてゐる }

文の主部は統覺の焦點となつたもので、これまでの經驗に由て比較的親しみのあるものであり、それが述部に於て叙述を受けるのであるが、それと同じく主語と修飾語の關係、述語と修飾語の關係も論理的關係で、主語は主語の修飾語に於て、述語は述語の修飾語に於てそれ〴〵説明を受けて居るのである。それ故に主語・述語が文の構成上大切な成分ならば、修飾語もまた重要なる成分であつて、時には之を缺けば文として不完全であり、しばしば全く意味を成さないことさへもある。

濡れた紙は切れない

冬の日ははやく暮れる

この花はたいへんきれいな色です

などいふ文で「濡れた」「はやく」「たいへんきれいな」などはいづれも修飾語であるが、それ〴〵その場合の思想の發表上必要缺くべからざるものであつて、之を取去つた「紙は切れない」「冬の日は暮れる」「この花は色です」ばかりでは形は文に似て居ても、完全に思想交換の目的を達し得るものと云ふことは出來ない。修飾語は文の構成上有用の度に種々の差異はあるが、いづれもその場合の具

體的思想を表す爲には無くてならぬものであつて、修飾語といふ名に誤られて修飾語と被修飾語との關係が同じく論理的關係に在ることを見逃してはならない。表象が部分に分解せられて統覺せられることを示すことは、主部・述部の場合と少しも異るところがないのである。「青い草」といふのも「たくさん生えてゐる」といふのもやはり表象の分解であり、その結果われわれの思想は要素に分析せられて、要素相互の間に新たなる關係が定められるのである。かくの如く文はヴントの所謂二元の法則によつて複雜な思想の發表に進んで行く。

修飾語は文法上二種に分つ。體言を修飾するものは形容詞の性質を帶びて居るから、形容詞的修飾語と稱けてゐる。

面白い話をきゝました
綺麗な花がたくさんさいてゐます
見てゐた人はありません
一枚の紙でも無駄にしてはならない

「面白い」「綺麗な」「見てゐた」「一枚の」は何れも形容詞的修飾語である。

用言や副詞を修飾するものは副詞の性質を帶びてゐるから副詞的修飾語といふ。

はやく歸らう
六時に發ちます
綺麗に掃除をなさい
あまり早く濟んだ

「はやく」「六時に」「綺麗に」「早く」「あまり」はいづれも副詞的修飾語である。

客語や補語と呼ばれるもののもこの修飾語の中から出たものである。

子供が新聞を賣つてゐる
蕾が花になる

「新聞」は客語、「蕾」は補語である。

客語といふのは述語が他動詞である時、その動作の及ぶ所、すなはちその目的をあらはす語、補語は述語が自動詞であつても他動詞であつても主語・述語・

客語が具つただけでは意義不充分な場合之を補ふ語であると說かれてゐる。

しかし客語や補語は國語に於てはまだ明瞭な範疇に發達して居らないもので、修飾語と補語との間に明瞭な區別がなく、補語と客語との間に截然たる境界を劃することが出來ない。補語は述語の叙述を補ふといはれるが、述語の意味を修飾する述語の修飾語との區別は如何、補語は之を缺く時は文の意味をなさぬといふが、修飾語も之なくしては文の意味をなさぬ場合が少くない。

鯨も哺乳動物の類である

東郷大將は東洋のネルソンである

「哺乳動物の」「東洋の」を除いたら何のことか分らない。

妄に神を說くべからず

兩虎鬪へば、その勢俱に生きず

「妄りに」や「俱に」があつてこそこの文に意味がある。

補語は「動作の標準」であるとして之を規定せんとする人がある。「鏡が柱にかゝる」の柱は標準であるといへるであらうが、

猿が木から落ちた

も補語といへるかどうか。

私は朝八時から業務につきます

「業務に」を動作の標準とするならば「八時から」も動作の標準といへないであらうか。

客語は述語が他動詞である場合に現れるもので、比較的明瞭に分たれるやうである。しかし動詞の自他の章で說いたやうに、國語に於ては自動詞・他動詞の區別がたゞ意味の上の區別で、英語・獨逸語などのやうに簡單に形式の上で區別が出來ない。動作が「他を處分するもの」とか「動作が他に及ぶもの」といつて區別しようとすれば、曖昧なものが出て來る。

木を伐る　家を建てる　木を植ゑる

など、「伐る」「建てる」「植ゑる」などは他動詞たることに論はない。

花を見る　音樂をきく　本をよむ

それも處分するといふ意味はちがふが他動詞である。もし之を形式に求めれば助詞の「を」を伴ふことにあるが、

橋を渡る　橋を通る　空を飛ぶ　道をあるく

などは果して他動詞とせられるかどうか。

英獨語等の自他の區別はそれが受身の形となるか否かと關係してゐる。すなはち他動詞は受身となるが、自動詞は受身とならない。直接客語を伴ひ文を受身の形にすれば、客語は轉換して主語となるものは他動詞に限るのである。しかるに國語に於ては他動詞のみならず自動詞でも受身の形になることがある。「子供が母に抱きつく」が受身の形にして「母が子供に抱きつかれる」といはれることは、他動詞の場合と少しもかはらない。それ故に述語の自動・他動、從て受身にする時、主語と轉換し得るか否かといふ點から見ても、客語と補語とを區別することが出來がたいのである。

要するに國語では客語も補語も特別の文章法上の範疇を發達させて居ないものであるから、修飾語のほかに客語や補語を說くといふことは實際に於て非常に困難である。全く西洋流に說かうとした人は主語・述語のほかに文の主要成分として客語・補語を立てたが、客語と補語との區別の曖昧なのを見て、客語と補語を一括して補語といひ又は客語と稱けるに至つた。それがまた實際に明瞭な範疇として認められないことは上來說いた通である。

修飾語と被修飾語との關係は、それが繰返されると共に機械的になり、凡ての文を言ふ場合に、一々この論理的分解を繰返して行ふことが無くなる。主部・述部の關係は如何なる場合にも論理的關係に在るものであるが、修飾語と主語・述語との關係に於ては、極めて普通な、始終使はれる詞の連續はそれを特に修飾語と感じなくなる。

子供が草の上に寢轉んでゐる

「草の上に」は明かに「寢轉んでゐる」の修飾語である。しかし「上に」は場所を示す助詞のやうに思はれて、やゝもすれば「草の」が「上」を修飾して居ることを忘れられる傾をもつてゐる。「寢ころんでゐる」ももとは「ねころんで」が「居る」を修飾して居たものであるが、「ねころんで居る」といふ言ひ方が固定して、今では「寢轉

ぶ」の存在態を現すものとなつてゐるのである。

このやうな過程をとつて助詞や助動詞は生じて來たものである。「山」への、「町より」のより、これらは萬葉に見える「大君のへ」のへ、「ゆりもあはむと」のゆりなどと同じもので、もとは名詞であつた事は明かである。「行きたり」が「行きてあり」から出たものであることも明かで、今日助詞や助動詞の如き從屬的な關係にあるものも、もとは修的飾關係に在つたものであることを知らなければならない。

國語に於ては助詞は文章法上の範疇として重要な役目を勤めてゐるが、その或ものは起源に於てかくの如き過程をとつて發達したものと思はれる。その轉化はよほど古い時代のことであるから、助詞の各について起源を知ることは出來ないが、元來かくの如き起源をもつたものが、助詞といふ一大範疇の萌芽であつたと推定して誤でないやうである。

文の論理的關係によつて、文の成分には主述的關係と修飾的關係の二つのあることを知つたが、こゝに又文の機械的關係によつて、文の成分にまた從屬的關係のあることを見出すであらう。總じて助詞及び助動詞が他の品詞と連續する場合は皆この從屬的關係を以てすることを知らなくてはならぬ。

以上の論理的關係はいづれの言語に於ても文構成の心理的基礎をなすものである。しかしながらそれが言語の外形にあらはれる上には、國語によつておのづからその慣習がちがふ。論理的範疇と文法的範疇とは常に同じではないのである。

歐羅巴の諸國語の論理的なのに比べると、わが國語はよほど非論理的である。その場の事情や前後の關係から推知される成分は、わが國語では成るべく言はない習慣がある。殊に私とかあなたとか人代名詞の如きは殆ど言はないで濟まさうとする。民族がちがへば當然思想發表の形式も異なる筈である。

もとより語法も一定不變のものではない。われわれの思想發表の仕方も昔に比べると次第に論理的になりつゝある。それは確かに外國語の影響によることが大きからう。

母親の手に依つていつともなく整へられた彼らの新しい着物、羽織、シャツ、ズボン下、足袋、履物の類は紙鳶と同じ意味に於て彼らの爲になされたお正月の準備でありました。彼らは新しく買はれた小い足袋、履物の一對を見てさへも來つゝある珍しい樂みの日を聯想しないで居られませんでした。彼らははしやいだ氣持で疊の青くなつた部屋部屋を飛び歩きました。（野上彌生、『新しき命』）

以前のどんな文章を見てもこんな代名詞を多く用ひた西洋風のものはあるまい。われわれの思想發表の形式が、論理的に赴き正確を求めむとする傾のあるのは、一面から見れば慶ぶべきことである。しかし論理が文章のすべてではない。論理に泥んで雅馴な國語の言ひまはし方を犧牲にしてはならない。

一ばんぼし　みつけた　あれ　あの　もり　の　すぎのきの　うへに
いま　つなひき　の　まつさいちゆう　です
ほえる　と　口が　あいて　くはへて　ゐた　さかなは　川の　なか
へ　おちて　しまひました

「みつけた」「まつさいちゆうです」「ほえると」といづれも述語ばかりで主語はない。しかしこれで立派な日本の文章であることを知らなければならない。

第三章　文の心理的關係

文の構成はまへに述べたやうに、論理的關係の上に基礎を置いて居るが、それに影響を與へるものは感情の働である。すなはち文を形作る觀念は話す人の興味に應じて文の構成上にそれぞれ位置を得てくる。この關係が語の順序の上に現れることは、諸國語に於て普く見る現象である。之を文の心理的關係といふ。

國語に於ては重きを措く語を文の最初に置いて、例へば

私がこれを書いた
といつたり、
これを私が書いた

といふやうになる。しかし「書いた」を先きにもつて行くことは出來ない。この點に於て國語でも英語でも羅甸語のやうに自由ではない。この缺を補ふものが語調の抑揚である。特に重きを措く語を他のものより高い調子をもつて發音することによつて、この心理的關係を現すことが出來る。

かういふ風に語る人の感情によつて高調された觀念はガベレンツやバウルなどのやうに、心理的の主部といふ名を以て呼んでもよい。かの論理的關係から生ずる主部・述部は論理的主部・述部、もしくは文法的主部・述部とよび、この心理的關係から出るものを心理的主部・述部と稱ける。論理的の主部・述部はすなはち論理學の所謂主辭賓辭に符合し、心理的主部・述部はガベレンツの說明を借りていへば、

聽く人に考へしめてその注意を惹かんとするものが心理的主部、又之を主題として聽く人が考へることが心理的述部

といふことになる。

論理的主部・述部は語の位置には關係ないが、心理的主部・述部は語の位置によつて示される。

一、私がこれを書いた

友達がけふ東京から來た

二、これを私が書いた

東京から友達がけふ來た

いづれも論理的主語言ひかへれば文法的主語は「私」「友達」であるが、心理的主語は(一)の方では「私」「友達」であり(二)の方では「これ」「東京から」である。前の文では論理的主語がまた心理的主語となつて居るが、後の文では修飾語が心理的主語となつて居るのである。

この心理的關係をあらはさうとする要求が、文の構成上特に明瞭な形をとつてあらはれたものが卽ち提部である。

東京は昔、江戸と云ひました

「東京は」は提部である。ちよつと見ると主語の樣に見えるが文法上の主語ではない。「東京は昔、江戸といはれました」又は「東京は昔、江戸といはれた都會で

ありますといはなければならないといふのは、言語上の事實を誣ひるものである。論理的主語は觀念上にとどまつて、文の上にあらはれて居らないのである。「云ひました」は之に對する述語である。「東京」は勿論「云ふ」といふ動作の目的で、

人が東京を昔、江戸と云ひました

といふ文に於て、東京が高調されたが爲に、特に提示せられて文の先頭に立つた場合、東京は昔、江戸といひました」といふやうな形式を現してくる。「は」はすなはちその提示せられたものを强める意味の助詞としてその役を勤めて居るのである。

パンは小麥でこしらへる
自分のことは自分でなさい
酒はいただきません
逃げるものは斬るぞ

これらも皆同樣に動作の目的をあらはす語が提部として揭げられた場合である。

他の修飾語も心理的主語となることがある。

羊羹は藤村が評判です

これも

藤村が羊羹では評判です

といふこと。しかしそれでは羊羹といふことを、聽く人の頭にまづ强く印象せしむるに足らぬゆゑに、羊羹を提部としたのである。これから

羊羹は藤村、最中は岡野
花は櫻木、人は武士

といふやうなのが說明出來る。

蜜柑は實をたべ金柑は皮を食べる

これも

蜜柑では實をたべ、金柑では皮をたべる

といふ「蜜柑では」「金柑では」等の副詞的修飾語を提部としたまでである。

提部が動作の目的を提示した場合、文語ではそれを下に「之を」といふ形でもう一度あらはすことがある。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す

帝國議會は毎年之を召集す

幹事及び評議員は會員之を選擧す

前に立戻つて考へて見るに

私がそれを書きました

といふ文のそれを高調しようとすれば語の順序をかへて、

それを私が書きました

とするが、國語に於ては語の位置といふことだけではその目的を達するに不充分である。それゆゑ論理的關係をかへてしまつて

それは私の書いたものだ

それは私の書いたのだ

なほ又それを前後にして

私のかいたのはそれだ

とすることも出來ると共に、さきに述べた提部を用ひて、

それは私が書いた

文語ならば

そは余之を著す

すなはち語の位置をかへて動作の目的たるものを文の先頭とし、目的を現すをを省いて之を提示する意味のはを以て特説したのである。文語に於てはこの場合そなんこその助詞を用ひる利益がある。

それぞ余之を著す

それなん余之を著す

それこそ余之を著せ

語の位置は論理的關係に縛られてさう自由に動かすことが出來ない。その缺を補ふものがすなはち音調の抑揚である。語調を特に强くすることによつて、吾人は文のいづれの部分に重きを措いてゐるかを現しうるのである。

提部の一種に時を現す副詞的修飾語が提示せられて、は又はもといふ助詞を伴ふ場合がある。之を特に副部と稱ける人がある。それが文の先頭に立ちはを伴つてゐるが故に主語に擬ふけれども、まへの提部と同じ心理的要求の一つの現れにすぎないのである。

今日は風が寒い
けふも暖かだ
今年は田がよく出來た
きのふは日本國中の人がみんな天皇陛下の萬歳を祝つたのです
此のごろは大さうぢがやかましくなつた

これらを

今日授業が始ります
風がけふは(も)寒い

などのやうに、時の副詞的修飾語が上に在つてもはもを伴はない場合、又はやもを伴つても主語の下にある場合と比べて見ると語勢の違ふことが分る。

總主と呼ばれるものも提部の一種である。一つに總主といふがこれに種類がある。

雪はいろが白い
私は脚がわるい
象は體大なり
支那は人口多し

是等は同格の主語の一つが提示せられた場合である。それ故に

秋は月がよい　秋は月こそよけれ
月は秋がよい　月は秋こそよけれ

といふやうな二樣の文が出來る。

動作の目的をあらはす修飾語の同格の一つが提示せられた場合は、すなはちまへに提部として最初に擧げた場合の特例に過ぎない。

植木は枝をたむべし
逃げるものは首を斬るぞ

述語の修飾語が提示せられたものもある。これも普通に總主とされてゐる。

人は名譽が大切である
あの人は子供が三人ある
あしのゆびは、おやゆび　と　こゆび　のほかには　ながないのです
あの人は先生がよい

「人には名譽が大切である」「あの人には子供が三人ある」などいふのよりも特に提示せられてゐるだけ、「人」「あの人」の注意を惹くことが大きいのである。

總じて統覺せられる表象の一部が高調されて主題となり、心理的主部として現れてゐる場合、之を提部といふのであつて、總主はその内の同格の主語たり、述語の修飾語たるべきものの提部となつた場合を特別なものと考へたのに過ぎない。すなはち形式の上からいへば「は」「も」「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」等をともなひて文の先頭に立ち、その下に別に主語がある場合、之をすべて提部と考へればよい。

提部は更に之を分解すれば提示語と修飾語とに分つことが出來る。

學校の前通は電車や自轉車が引切なしに往來します

「前通」は提示語で、「學校の」はその修飾語である。

前章來、論じた所によつて、讀者は文の成分として左の三つのあることを知つたであらう。

主部
述部
提部

さうしてその各を分解する時は、

主部……主語とその修飾語
述部……述語とその修飾語
提部……提示語とその修飾語

となるのである。

第四章　文の擴張

冬　風　吹く　寒い
の　が

右のやうな單語はいろいろの連合をなして、われわれの談話の中にあらはれてくる。

冬の　風の　冬が　風が　冬は
風は　冬の風　吹く風　寒い風
寒く吹く風

かういふ風に二つ以上の單語の連合してゐるものを連語といふ。すなはち單語はそれぞれ連合して、連語といふ形でもつて文を組織してくるのである。

風が寒い　冬は寒い
冬の風は寒い　寒い風が吹く

冬の寒い風が吹く　冬は寒い風が吹く

單語が一たび或連合をとつて語られたり、聞かれたりすると、次には他の連合よりも未來に於ては多く想起され、又多く用ひられる傾向を得てくるもので、かくの如く度々語られ聞かれた結果は、遂に固形して少しの刺戟によつて直に意識に再生し來り、文の成分たる役目を果して行くのである。卽ち丁度單語を發音する場合、それを組成してゐる箇々の聲音に對して無意識であるとひとしく、連語をはなす場合、われわれは之を組成してゐる箇々の品詞に對して無意識である。われわれの談話はかくの如き連語の組織してゐる文の系列である。われわれは單語をもつて語つてゐるのではない、文をもつて語つてゐるのである。少くとも連語をもつて語つてゐるのである。われわれは經驗によつて文の型を會得する。われわれは文の型を骨組として語るものであつて、談話の際にただその間に數語の拔きさしをすれば足りるのである。もしちよつと長い文でも一々單語に分解して、その關係をきめるやうなことであつたならば、その勞は並大抵ではない。內省して見ても文を組織す

るに當つて、われわれは成分を意識的に配列して居りはしない。もしわれわれが話をする場合、一々の文、一々の連語に注意の活動を必要としたならば、われわれは極簡單なことを云ふにも、非常な熟練と多大な勢力とを費さねばならぬのである。

かくの如く文の組織の上に連語が機械化する如く、更に進んでは文が機械化して長い複雜なる文を構成して行く。かくて一つの文が他の文に或關係をもつて連合してゆくことによつて、文はその形を擴げて行くのである。此の如く文が獨立を失ひ、或關係をもつて他の文と結合し、他の文の一部をなす場合、之を句と稱ける。すなはち

雪が降る
月がよい
空晴れたり

などは

雪が降るから私はけふ行きません
月のよい夜私どもは舟でかへりました
その日は空晴れたる小春日和なりき

の如き文の中に句となつてゐる。「雪が降るから」は「行きません」といふ連語を修飾して「私はけふは行きません」といふ文に結びついて居り「月のよい」は「夜」を修飾して「夜、私どもは舟でかへりました」と結びついてゐる。又「空晴れたる」は「小春日和」を修飾して「その日は小春日和なりき」と結びついてゐる。かくの如く文が獨立を失つて、他の文に結合して居るものが句である。

要するに連語でも句でも二箇以上の單語の結合したものであるが、それが文の組織上に於ては、一箇の單語と同じ資格を以て働いてゐるのである。

櫻の花がさいた
月きよき夕べ、友を訪れぬ

「さくらの」「月きよき」は共に一箇の形容詞と同じ働をしてゐる。

只今學校から歸りました
風吹けば舟を出さず

「學校から」「風ふけば」は共に一箇の副詞と同じ資格をもつて文の構成に與つてゐるのである。このやうに連語でも句でも、われ〳〵の意識に於て機械化するものであるから、われ〳〵は談話をする際、一々論理的關係を辿つて單語を結合してかたるといふ面倒を繰返すには及ばないのである。

文が獨立を失つて、他の文に結合して行くことによつて、文は擴張して行く。こゝに單文と複文、重文との區別を生ずる。

單文といふのは句を含まない文である。云ひかへれば主語と述語との關係が單一である文をいふ。

風がさむい

さむい風が、川上から吹いてくる

もう今年も霜が降りました

木のえだに、ことりが十ぱとまつてゐました

にいさんがおともだちと、にはに大きなゆきだるまをこしらへました

そここゝにこひのぼりが高く風におよいでゐます

むかし藤原の君ときこゆる一世の源氏おはしましけり（宇津保）

おのれは天上より來り給ひし人の御子どもなり（同）

日本の衆生この因緣に生々世々に佛にあひ奉り法をきくべし（同）

主語もしくは述語、乃至主語、述語共に二つ以上あつても兩者の關係が單一であればやはり單文である。

うしとうまがゐます

菊も桔梗もダリアもコスモスも皆さきそろつた

鳥は大きなこゑでわる口をいひ、太いくちばしでつつきます

犬がさかなをくはへて、はしのうへをとほりました

藤原の言實、橘の季衡、こと人々おひ來たり（土佐）

見おくりの人々、見まつり送りて歸りぬ（竹取）

大空より人、雲に乘りておりきて、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ち連ねたり（同）

次のごときものは提部を持つてゐる單文である。

三分の木のしもの品は日本の衆生俊蔭にほどこす(宇津保)

凡そ事物の用は、各其の理を究め、事實を詳にし、天地の常經を以て糾明すべし(素行、士道)

二つ以上の單文が結合する場合、重文と複文とを生ずる。重文といふのは二つ以上の單文が結合して互に對等の句を構成してゐる場合である。

花もあり、實もある

雨は降るし、道はわるい

一ばんふといのがおやゆびで、一ばんほそいのがこゆびです

のこぎりで木をきるものもあり、のみであなをほるものもあり、かんなで板をけづるものあります

空ははてもなくすんで、所々にちぎれ雪が飛んでゐる

葉はもう七寸ほどにのびて、根も四寸ほどになつてゐた

男の生徒も居れば、女の生徒もゐる

みちばたにすみれやたんぽぽがさいてゐるしむぎ畠の上にはあさはやくからひばりがさへづつてゐます

あさりや蛤は砂や泥の中に居り、かきやあはびは岩についてゐる

はごろもの袖はかるく風にまひ、はごろもの色は日光にかがやきました

てふ〳〵は花から花へひら〳〵とまひ、はちはせつせとみつをあつめてゐます

魚類にはいはし・あぢ・かつをなどのやうに、水の表面に近い所を泳ぐものがあり、たひ・あなご・はもなどのやうに岩のかげや海藻の間を泳ぐものがあり、かれひ・ひらめなどのやうに、底に沈んでゐるものもある

林侑はやく身まかり、其の子また若くして凶死にあへり(藤樹、鑑草)

洲崎にさわぐ千鳥のこゑは曉の恨をそへ、せがいにかゝる梶浪は夜半に心を碎くかな(平家)

烏瑟たかくあらはれて半天の雲に入り、白毫あらたにみがきて滿月の光を耀かす(東關紀行)

所のさま、外よりいみじくめでたく、水の色、石のたゞずまひ、庭のおも、梢の

けしきもいみじうおもしろし（濱松中納言）

重文を構成する句を獨立句と稱ける。

獨立句の接續は中止形にばかり限らない。助詞のてやばなどを添へたものも、こゝに擧げた例に見えるやうなのは重文を構成する場合である。日常の談話などからいへば、むしろ中止形を用ひることの方が少いといはなければならない。

獨立句

重文に於ける句の結合が更にその度を進めたものが複文である。單文が從屬的の句をなし、他の文の一部をなす時その文を稱けて複文といふ。

複文

さうしてその從屬的關係の種類によつて、句に

形容句
副詞句
名詞句

を生ずる。

次のやうなのはいづれも複文である。

日のはいる方が西です

あの白壁造の土藏のある家がそれだ

文ことばなめき人こそいとどにくれ（枕）

父母悲しむ事更にたとふべき方なし（宇津保）

日影も見えぬ木の下道、あはれにこゝろぼそし（東關）

宮のこの世ならず思ひ聞え給へる御氣色見知り侍りにしより（濱松）

こゝにも今は人しげからむ事はいとつきなかるべし（同）

これらの句は形容詞と同じ働をしてゐるから形容句。

雨が降ると道がわるい

矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります

雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう

赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、へうきんな五平ぢいさんが、時々へんな掛聲をして皆を笑はせる

金銀財寶あれば、金銀財寶憂となる（藤樹、鑑草）

形容句

副詞句

汝不孝の子ならば親にながきなげきあらせよ(宇津保)
みやこ鳥ともをつらねてかへりなば、ちどりははまをなく〳〵や經む(同)
日あしければ、舟出さず(土佐)
あるいうらに鹽の煙は立ちけれど、こなたにかへす風ぞなかりし(蜻蛉)
わが袖のこぼりは春も知らなくに、こゝろとけても人の行くかな(同)
朝霧の峯にもをにも立ちこめて、かへらむ方もこえそ知られね(濱松)
深き夜の月浮雲だにたなびかず澄めるに(同)

これらの句は副詞と同じ働をしつゐるから副詞句

年の立つのははやいものだ
私はあなたがたが御存知ないのを驚きました
おまへは早くかへるがよい
それはあなたが勉強しすぎるからです
その二十日あまりに中納言の法師になり給ひにしこそあはれなりしか

(枕)

名詞句
複雜なる文

瓦屋どものむね霞みわたりてあるを見るに、むかしうちへまゐりしに過ぎざまに見えし程など思ひ出でられて(讃岐)
何事につけてもすべてわが世の人のこれにならぶなかりけり(濱松)

これらの句は名詞の用をしてゐるのであるから名詞句といふのである。

以上の各種の句は種々なる連合をなして、複雜なる重文や曲折ある複文を形作り、さうして長大なる文の形に擴つて行くのである。

あなたがおたちになればわたくしもたち、あなたがおあるきになればわたくしもあるきます(國定讀本)

日の出る方が東で、日のはいる方が西です(同)

いづれも二つの獨立句から成る重文、さうしてまへの文では「あなたがおたちになれば」「あなたがおあるきになれば」がいづれも副詞句であり、後の文では「日の出る」「日のはいる」いづれも形容句であるから、この二つの重文は二つの複文の形をかへて獨立句になつたものから成立つてゐるのである。

山畑に稗の作つてあるのも珍らしく、谷間の白い山ゆりの花のまばらに

見えるのも面白い(國定讀本)

「山畑に稗の作つてある」「谷間に白い山ゆりの花のまばらに見える」いづれも名詞句、それゆゑにこれは名詞句を含んでゐる二つの獨立句から成る重文である。

私は長生をして居ますので、東の村や西の村に、人が生れたり、死んだり、家がたつたりこはれたり、火事があつたり、水が出たりしたことをみんな見て知つて居ます(國定讀本)

これは「私は長生をして居ますので」といふ副詞句が「見て知つて知ます」といふ述語(主語「私は」は省略)を修飾してゐる複文であつて、その動作の目的をあらはす「こと」といふ修飾語に「人が生れたり、死んだり、家がたつたり、こはれたり、火事があつたり、水が出たり」といふ獨立句を疊んだ重文が形容詞的修飾語となつてゐるのである。

北風が吹いてさむい夕方に、姉のおつると妹のおふみが野道を通つて歸つて來ると、八つばかりの女の子がたもとを顔におしあてて、しく〳〵と道ばたでないてゐました(國定讀本)

これは「北風が吹いてさむい夕方に、姉のおつると妹のおふみが野道を通つて歸つて來ると」といふ長い副詞句をもつ複文である。その副詞句の述語「歸つてくる」を修飾する「北風が吹いてさむい夕方に」といふ副詞的修飾語の中に「北風が吹いて」といふ副詞句が含まれてゐる。

主人が歸つた頃は、夕飯の仕度が出來て居て、岸本は樹木の多い庭に臨んだ食堂の方へ案内された(島崎藤村)

「主人が歸つた頃は」といふ提部をもつた「夕飯の仕度が出來て居て」といふ副詞句が、文の述部たる「樹木の多い庭に臨んだ食堂の方へ案内された」を修飾してゐる複文である。なほ細かに見ると、提部の中には「主人が歸つた」といふ形容句を含み、文の述語の修飾語たる「樹木の多い庭に臨んだ食堂の方へ」といふのには「樹木の多い」といふ形容句を含んでゐるのである。文の主語は勿論「岸本」である。

遲れ馳せに宗一の駈け着けた頃は既に、一番目の大詰の幕が下りて、天井、

棧敷、一面の穹窿に電燈が燦然と閃き、劇場の內部はさながら灯の雨が降るやうに光の海を現じて居た(谷崎潤一郎)

「遲れ馳せに宗一の馳け着けた頃は」は提部、その中に「遲れ馳せに宗一の馳けつけた」といふ形容句をもつて居る。「既に一番目の大詰の幕が下りて」は副詞句、「天井、棧敷一面の穹窿に電燈が燦然と閃き」と「劇場の內部はさながら灯の雨が降るやうに光の海を現じて居た」とは獨立句、さうして第二の獨立句は「灯の雨が降るやうに」といふ副詞句を含んだ複文の形を變へたものである。それ故に全文は二つの獨立句から出來てゐる重文が、副詞句を頂いて複文となり、更に形容句をもつてゐる提部を頂いて、全體が又大きい複文を形作つたものである。

花はいろ〳〵にほへども、主とたのむ人もなく、月はよな〳〵さし入れども、ながめてあかすぬしもなし(平家)

「花はいろ〳〵にほへども」といふ副詞句は「主とたのむ人もなく」に從屬してその全體が獨立句をなし、「月はよな〳〵さし入れども」といふ副詞句が「ながめてあかすぬしもなし」に從屬して作つてゐる獨立句に對立して全文は二つの獨立句から成る重文を成してゐるのである。

鶯のたにより出づるこゑなくば春くることをたれか知らまし(古今)

「鶯のたにより出づるこゑなくば」が副詞句。「春くることをたれか知らまし」の述語「知らまし」を修飾してゐて複文。「鶯のたにより出づる」は「聲」を修飾してゐる形容句。「こゑ」は副詞句の主語、「なく」が述語。「春くる」は形容句で「こと」を修飾し、文の主語は「たれ」で「知らまし」が述語である。

年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中あらたまりて、更衣のほどなども今めかしきを、まして祭の頃は大かたの空のけしき心地よげなるに、前齋院にはつれ〳〵となながめ給ふ(源氏)

「年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば」は二つの獨立句から成る重文が副詞句になつて、次の「世の中あらたまりて、更衣のほどなども今めかしき」といふ二つの獨立句を疊んだ重文に從屬して居り、兩者相連つて副詞句となり、今一つの副詞句、「まして祭の頃は大かたの空のけしき心地よげなるに」と共に「前齋院

文脈の理解

にはつれ〳〵とながめ給ふ」の述部「つれ〳〵とながめ給ふ」の修飾語となつてゐるのである。「まして祭の頃は大かたの空のけしき心地よげなるに」といふ句には祭の頃はといふ提部があり、大かたの空のけしきといふ主部に對して心ちよげなるといふ述部があるのである。全文は二つの副詞句をもつてゐる複文である。「つれ〳〵と」はまた副詞的修飾語。

以上のごとく種々の成分があり、句の變化があり、その間には種々の省略が行はれ、轉倒が施されるから、文はさまざまの曲折を描き、いろいろの姿態をなしてあらはれてくる。それ故にわれわれは第一に正確に一々の語句を理解し、語句相互の關係を明瞭にし、觀念の連絡を審かにして、事實の主客輕重を吟味し、由てもつて文の主想と空想とを區別して記述の中心點を見出して行かなければならぬ。

本篇の始に述べたやうに、文といふものは之を話すものの全表象が個々の成分に分析せられて發表されたものであるから、聽くものはこの分析せられてあらはれてゐるものを總合して、語るものゝ思想を知り、心情を察しなければならぬ。

われわれは文を吟味する場合、分析的に語の形式を研究すると共に、總合的に思想が如何なる成分によつて構成せられて行くかを注意しなければならない。國語教授に於てもその取扱方は學ぶ者の程度によつて方法を異にするが、どこが主部でどこが述部であるか、どれが主語でどれがその修飾語であるか、どれが述語でどれがその修飾語であるか、いかなる方法によるにしても、文に於ける成分の關係を明かにし、文脈を通じ、思想の筋路を見つけるやうにすることが肝要である。かくの如くして始めて複雜した文章でもよく思想の條理を正し、一篇の結構を理解し、その眼目を捉へることが出來るのである。

また思想の現れ方を理解し、正當なる序列を以て自分の思想を發表すれば、如何に錯綜した事項も之を簡潔なる文章にあらはし、前後の照應を明かにして脈絡貫通した序述をなしうるのである。電報・はがき等の短い文でも、論文・演說のやうな長い文でも、その根本とするところは主部・述部から成る基本の形に外ならないのである。その場合の必要に應じて、或は長くくはしく或は

短くつゞまやかに、理路整然として自由に省略し轉倒して、正しくおもしろく所要の意味を傳へることが綴り方・話し方の任務である。國語教育の進歩が今日の人の書く文章をしていかに論理的に、いかに精緻なものになしつゝあるか、古文と今日の口語文との組織を比較吟味したならば思ひ半に過ぐるものがあらう。

第五章　係結（かゝり結び）

主語は述語に係り、述語は主語を承けて結ぶ。「かゝる」といふのは意味がつづくことであり、結ぶといふのは文を終止することである。かういふ意味で係りを求めれば主語は述語にかゝり、修飾語は被修飾語にかゝる。文の述語とこれにかゝるものとの間にある照應を昔から係結といひ、普通に文の結は終止形であるが、特別の助詞があれば他の活用形を用ふ。係を文の述語にかゝるものと、然らざるものに分てば前者には係結があり、後者には係があつて結びがない。句も文の述語を修飾する時は、そのかゝりは文の述語が結びになるが、句中のかゝりは句の述語で結びもしくは句の連續上結ばずに續ける。後者はこれを轉結といふ。係に左の三種類がある。

一、常の係
二、ぞなむやかの係
三、こその係

この係の種類によつて文の結はそれぞれ適當に調節される。

この研究に整然たる組織を與へたものは本居宣長であつて、まづ「紐鏡」に係結の呼應の規則を圖を以て示し、これが基礎を確めるために八代集から豐富なる證歌を蒐めて「詞の玉緒」を著した。いはゆる玉の緒派の澤山の著述はその說を繼承したもので、國語學史上語法の法則にしてこれ位大切なものとして喧ましく論ぜられたものはなかつたのである。

現代の文語にはぞ・なむやかこそその係を用ふることが少い。平安朝時代の人々の間にこれを必要としたのである。すなはちその時代に於ける一時の流行であつたのである。現に玉の緒の卷七に「古風の部」といふのがある。奈

良朝時代にはまだ一つの規則が發達してゐなかつたことが分る。平安朝に入つても例外があつた。平安朝時代、洗練された宮廷語の間にこの規則が發達し、鎌倉時代以後また人の考へ方の變化と共にこの規則も亂れ、今日に至つては平安朝時代に見た特別の結びはなくなつてしまつたのである。今日の口語ではぞ・なむ・やかの係はなく、常の係とこその係があるばかりである。たとへば

雨が降る
雨こそ降る
雨降れ……(命令)
雨こそ降れ……(同)

結びは終止形と命令形とあるばかりである。

係結の規則を説くについて、われわれはまづ文をその叙述の性質によつて左の四種に區別する。

一、平叙文……單に事物を叙述するもので叙述の形式の尋常なるもの。

雨靜かに降る
わが心隱としておだやかならず

二、疑問文……疑問の意を含むもので、疑問の語又は助詞「か」「や」を用ひるもの。

雨降れるか
雨か降る
わが胸のいかばかりやすかるべき

三、命令文……叙述に命令の意をあらはしたもので、述語が命令形となり又は文中に禁止の助詞を用ひたもの。

雨靜かに降れ
風よ吹け波よくだけよ
雨降るな

四、感嘆文……叙述に感動の意をあらはし、感動詞又は感動の助詞「かな」「か」「や」「よ」などを用ひたもの。但し感動の語は全文にかゝはるものであること

とを注意しなければならぬ。

雨静かに降るよ
寂しきかな秋の色や
あはれきのふ翁まろをいみじううちしかな

文を叙述の體裁より以上四種に分つことが、徒に西洋模倣にして國語の語法を説く上には無用のものであると論ずる人もあるが、係結を説く上に於てはその必要のあることを感ずるであらう。平叙文にはこの係あり、疑問文にはかの係ありとなして、係結を文の四體によつて眺めなければ、かの「今は夢とのみこそ思召せ」といふのが命令でないことも分らず、さてその二十日あまりに中納言の法師になりたまひしこそあはれなりしか」といふのが疑問でないといふことも分らず、さてはまた「汝こそ告げよ」「いく時なむ過ぎし」といふのが誤であることも分らないのである。

宣長は係を

一、は、も徒の係

二、ぞのや何の係

三、こその係

の三つに分けた。大槻博士がこれを改めてさきに擧げた常の係ぞなむやかの係、こその係の三つにして今は普通に之に從つてゐる。由て余も之によつて述べる。

一、平叙文の係結

常の係……終止形で結ぶ

ぞ・なむの係……連體形で結ぶ

こその係……已然形で結ぶ

物なむ心ぼそくおぼゆる（竹取）

法師ばらの二人三人ものがたりしつゝ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする（源氏）

今はとて天のはごろもきるをりぞ君をあはれとおもひいでぬる（同）

かやうのすぢは親ある人はそれこそともかくもいそげ（落窪）

疑問文の係結

二、疑問文の係結

上に疑問の語のある時とない時とでちがふ。

イ、疑問の語のある時

常の係……連體形若しくは連體形にか又はぞを添へたもので結ぶ。

ぞ・かの係　……連體形で結ぶ。

お心ちいかゞおぼさるゝ（竹取）

などいらへはし給ふ人はなきぞ（濱松）

たがぬぎかけし藤袴ぞも（古今）

いづれの時かまた君を見るべき

何ぞはからむ

ロ、疑問の語のない時

常の係……終止形にやを添へたもの、又は連體形にかを添へたもの

で結ぶ。

や・かの係　……連體形で結ぶ

木の葉がくれの聲はきこゆや

花かあらぬか波のよするか

龍の首の玉やとりておはしたる

いかばかりか苦しき

三、命令文の係

常の係……命令形で結ぶ

又な・な―そ・なかれ・ざれ等で結ぶ

汝自身を知れ

あるじなしとて春を忘るな

まさなき事なのたまひそ

君死にたまふことなかれ

汝悲しまざれ

四、感嘆文の係

常の係を感嘆の助詞で結び、又は平叙文、疑問文、命令文等の一旦結ばれた

ものに感動詞又は感動の助詞を添へる。

君と吾と、憶へばはかなき契なりけるよ

あゝ天地風雲多し、人間なんぞ涕涙のしげきや

あら嬉しや、人々此の程の喜びをも笑へよかし

さきにも述べた通り、係結の呼應は平安朝時代の流行である。その時代にもこれに叶はぬものがあつたし、ましてその以後に於てはいたく亂れて一致を保たなくなつた。たとへば

おのれがやうなる侍などはただこそ居たれ(千訓抄)

などの例を見れば命令文にもこその係結が用ひられるやうになつた迹を見るべく

いづれの船に乗らるべきや(千訓抄)

いかにおほせらるゝやらん(徒然草)

みさせたまひしや(頓阿高野日記)

などを見れば疑問文の係結にも破格をあらはしてゐることが窺はれる。文部省の文法許容事項中の一二の條項がこれらと關係してゐることは助詞の條に述べた通である。

さてはじめに係は結びと呼應することを述べた。それ故に句が副詞的修飾語として文の述語にかゝる時は、そこに係結の呼應が起るが、句中のかゝりは文の述語で結ぶことは出來ぬ。

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ(古今)

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ(同)

句中のかゝりは句の述語で結ぶか、句の連續上結ばずにあとに續ける。前者は條件の場合であり、後者は轉結の場合である。

つばさなすあり通ひつゝ見らめども人こそ知らね松は知るらむ(萬葉)

昨日こそさ苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風のふく(古今)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ(同)

あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人も待ちけり(同)

わが袖は潮干に見えぬ沖の石や人こそ知らぬかわく間もなし(千載)

いづれも條件をあらはすもので、之れにどもをつけて用ひるのはむしろ新しい形である。こその係結の起源はおそらくこゝに在つたのであらう。

こゝろぼそく悲しくこそ覺ゆるに（宇津保）

畫にかきたるをこそかゝる事は見るに（枕）

わが手に劵こそなけれども、わが子の家なり（落窪）

雪かとぞよそに見つれどさくら花をりては似たる色なかりけり

いにしへは月をのみこそ眺めしに今は日をまつわが身なりけり

めづらしき春もあすとぞきこゆればくれなむとしを何かをしまむ

物をこそいはねど花も心あればさくべき程をすごしやはする

心こそうきよの外のやどなれどすむことかたきわが身なりけり

これらは轉結の例である。

轉結

掛詞

掛詞といふのもこの一種と見るべきである。

さよ千鳥こゑこそ近くなるみ潟かたぶく月に潮やみつらむ

別るれば心をのみぞつくし櫛さして逢ふべき程を知らねば

秋の夜の月やをしまのあまの原明がた近き沖のつり舟

なにはづを今日こそみつの浦ごとにこれやこのよをうみわたる舟

しるらめや身こそ人目をはばかりの關に涙はとまらざりけり

國語國文法要義　終

昭和二年二月二十日印刷
昭和二年三月二十八日發行

國語國文法要義
定價金四圓八拾錢

著作者　小林好日
東京市本郷區元町一丁目三番地
發行者　鈴木芀
東京市本郷區元町一丁目三番地
印刷者　田邊當義

發行所
東京市本郷區元町一丁目三番地
京文社
電話小石川五九八六番
振替東京八二二六番

（濱口印刷所印行）

◇京文社出版書類◇

文學博士 服部宇之吉著 改訂 東洋倫理綱要 藥判上製 四百餘頁 博士の東洋倫理說は西洋倫理と比較參酌し、組織整然、識見卓越、從來諸說の缺點を補ひて時流を抽く。文檢受驗者の必讀書 送料二圓二十七錢

文學博士 服部宇之吉著 孔子及孔子教 藥判上製 四百三十餘頁 自ら孔子の徒を以て任じ孔子教の學生の名著、各方面より孔子及孔子教を論じて剩す處がない 送料二圓二十七錢

文學博士 服部宇之吉著 增訂 支那研究 藥判上製 六百七十頁 博士嘗て支那に留ること數歲、即ち本書は其際に於ける實地研究の結晶にして、實に支那問題の根本的解決に本書に俟つ可し 送料二圓四十七錢

文學博士 服部宇之吉著 支那の國民性と思想 四六判上製 三百八十餘頁 主として支那の國民性及國民思想に就て論述せるもの、附錄として『儒教と現代思潮』五講を添ふ。特に文檢受驗者に薦む 送料二圓五十八錢

文學博士 坪井九馬三著 改訂增補 史學研究法 藥判上製 四百三十頁 陽の紙價を高からしめ書、頃者博士親しく補訂して更に世に問ふ。蓋し史學研究者の羅針盤 送料二圓五十錢

文學博士 坪井九馬三著 國民國語のあけぼの 藥判上製 百餘頁 「古來日本國民は何處より來れるか」その「國語は世界の語系中の何れに屬するか」の二問題に就て論述せる博士會心の名著 送料二圓五十錢

文學博士 佐々木信綱著 和歌史新考 藥判上製 五百餘頁 和歌界の書宿たる博士は、特に和歌史の研究を以て知らる。本書は最近の研究を纏められしものにして、實に權威ある文獻 送料四圓三十錢

文學博士 森槐南著 作詩法講話 四六判上製 三百五十餘頁 明治時代に於ける漢詩界の第一人者たる博士が、嘗て國學院大學に於て講義されしもので、簡明に詩學の要領を說述せる名著 送料二圓二十八錢

◇京文社出版書類◇

柘植信秀著 新時代の親鸞教 四六判上製 三百五十餘頁 宗の傳統信條に對する自覺たるべき民衆の挑戰となし、其れを批判しつゝ專統的眞宗を論評した書 送料二圓二十八錢

親鸞流行の思想の根據を既成眞世道人心の眞意せる北朝時代に、或は名分を重んじ奉公の實をあげ、或は利慾の爲に汚名を殘せる其の奇しき對照を叙述せる 送料二圓四十餘頁

文學士 藤田精一著 南朝史話 忠不忠 四六判上製 二百四十餘頁

岡鬼太郎著 第一卷 鬼太郎脚本集 四六判上製 五百餘頁 劇作家として我劇壇に於ける最高權威たる著者の脚本集にして、今樣薩摩歌、齋討龜山話、其姿顏七編外四篇を收む 送料十八錢

岡鬼太郎著 第二卷 鬼太郎脚本集 四六判上製 五百廿餘頁 本書には深興三玉兎横櫛、散書紅かしく、昔模鼠小紋外九篇を收む。何れも嘗て東西一流の俳優によつて上演されし名篇揃 送料十八錢

理學博士 早坂一郎著 地と人 四六判上製 三百頁 斯界の權威たる早坂博士の地史學人類學に關する研究論集にして、收むるところ十二篇、挿圖十八葉、斯學研究の好資料たり 送料十八錢

東京音樂學校講師 牛山充著 音樂叢書序編 音樂鑑賞論 四六判上製 四百七十餘頁 『音樂鑑賞の智識』改題、凡そ音樂を味ふに於て生じ來る汎ゆる問題を鮮切平易に解說せるもの、音樂鑑賞の戶扉を開くの鍵 送料十八錢

理學士 田邊尙雄著 音樂叢書第一編 音樂概論 四六判上製 四百六十餘頁 西洋音樂に關する正確なる知識と、完全なる理解とを欲する人々の爲めに、その基礎的知識を與ふる好著 送料十八錢

東京音樂學校講師 草川宣雄著 音樂叢書第二編 唱歌法及發聲法 四六判上製 三百二十餘頁 歌法發聲法の發見は、發聲研究に伴ふ責務であるとも主張する著者が聲樂界の因襲を破れる書 送料十八錢

◇京文社出版書類◇

文學士 小林愛雄著
音樂叢書第四編
詩と音樂と舞踊
四六判上製 三百二十餘頁 價二圓四錢 送料十八錢
古今東西に渉る民謠童謠其他の歌謠、叙情曲舞踏曲等に渉り、詩と音樂と舞踊の反撥と融合の史的事實と美的考察とを詳述す

佐藤謙三著
音樂叢書第八編
バイオリン奏法の研究
四六判上製 四百餘頁 價三圓 送料十八錢
在獨逸の著者が伯林圖書館の汎ゆる材料を參照し、且つ多年の蘊蓄を傾注して大成せる書。日本の類書中嶄然頭角を拔く名著

文學士 小林愛雄著
音樂叢書第九編
歌劇の研究
四六判上製 三百六十餘頁 價二圓三十錢 送料十八錢
日本に於ける歌劇の先驅者として第一人者たる著者の術の研究を大成せる書。歌劇研究者愛好者にとりて必讀書たり

理學士 田邊尙雄著
音樂叢書第十一編
日本音樂の研究
四六判上製 四百七十餘頁 價三圓 送料十八錢
廣く東洋音樂に基き從來の日本音樂史上に劃期的の研究を發表せるもので、從來世人の豫想せざりし新研究を網羅せる文獻

東京高等學校講師 田中敬一著
作曲の入門
菊判上製 三百八十餘頁 價三圓九十錢 送料二十七錢
樂曲の形式と伴奏和聲法を極めて平易に說げる書。從來難解とせる問題を叙述して何人にも一讀作曲の基礎知識を了知せしむ

時高庸紀編
細目式教材解說
童謠名曲の教へ方
菊判上製 三百十餘頁 價二圓七十錢 送料十八錢
小學校の唱歌教授界が多數の歌曲を採捨に迷ふに際し、優秀なる作品を研究收錄して教材選擇の標準を示せる書

文學博士 深作安文著
現代と思索
菊版上製 四百五十餘頁 價三圓五十錢 送料十八錢
混亂せる我現代思想界に向つて其倫理的立脚地より國民の向ふ處を示されたる博士最近の力作。特に青年指導者の絕好參考書

文學博士 加藤玄智著
東西思想の比較研究
四六版上製 三百五十餘頁 價二圓五十錢 送料十八錢
西洋及び支那印度文明と我國固有の精神文明との變遷發達の跡を探り現代思想界を批判したる人類精神生活史とも稱すべき書

531
98

Use a book as a bee
does a flower.